

Title	地域の子育て支援における高齢男性の意識と課題
Author(s)	塩谷, 侑佳
Citation	お茶の水女子大学子ども学研究紀要
Issue Date	2017-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10083/61748
Rights	
Resource Type	Departmental Bulletin Paper
Resource Version	publisher
Additional Information	

This document is downloaded at: 2017-10-17T11:22:07Z



Ochanomizu University

地域の子育て支援における高齢男性の意識と課題

塩谷 侑佳*

Childcare Support by Elderly Males in the Community:

Their Awareness and Issues of Childcare Support

Yuka SHIOTANI

Abstract

The declining birthrate and aging population is progressing in Japan. Under such circumstances, childcare support by elderly people is required in society. Childcare support by elderly men has lately attracted considerable attention. The purpose of this study is to clarify the consciousness of elderly men working on childcare support in the community. For this purpose, I had interviews with them. The interviews revealed their advantages and difficulties felt by elderly men working on childcare support. There were three advantages as an elderly male: based on the relationships between elderly men, based on their past experience, and based on the specificity of childcare support by elderly men. Elderly men are aware of their advantages that they are elderly and male. On the other hand, they feel two difficulties of extension of experience working for their company and specificity of childcare support by elderly men. Elderly men are doing various efforts to overcome difficulties as a group.

Keywords: Childcare support, community, elderly person, male

1 問題と目的

少子高齢化が進んでいるわが国において、子育て支援の中でも特に重点化されている地域子育て支援の一環として、「地域の高齢者による子育て支援」が近年注目されている。これは、地域在住の高齢者が子育て支援の担い手になるという試みである。この支援の特徴は、親世代の地域における子育ての孤立を防ぐのみならず、支援者である高齢者の地域における役割の獲得や生きがいの獲得にも寄与するという点にある。こういった点からも高齢者による子育て支援の取組は全国に広がりを見せている¹。

高齢者による子育て支援について、八重樫ら(2003)は、子育てに関する知識や技術が不十分なまま母親になるものが増加している中で、祖父母世代でもとりわけ子育て経験のある祖母の、子育てについての知識に期待が寄せられていると述べている。一方、清水(2006)は、子育て経験がなくても、子育て支援に

キーワード：子育て支援、地域、高齢者、男性

* お茶の水女子大学大学院博士前期課程

関わる祖父母世代の多くが女性であるということから、男性を対象とした研究はほとんどないと説いている。しかし、平田(2003)は、男性が子育ての場に参加することは、子育てが女性のみを負担となることを避けるためのみならず、子どもに社会の規範やルールを示していくなど、子どもの社会化の上で大きな機能を果たすとしている。したがって、子育て支援として祖父世代が関わることは、祖母世代の関わりとは異なる効果を期待できるといわれている。

高齢者による子育て支援に関する先行研究では、子育て中の親世代は地域の祖父母世代に対して子育て支援への関与を求めており、祖父母世代も地域の子育て支援に対して意欲を抱いていることが明らかになっている(田淵ら,2006;名須川ら,2015)。そして、高齢者の地域での子育て支援活動への参加を促すためには、きっかけとなる場の必要性和祖父母世代をつなぐ役割が重要であることが明らかになっている(横川,2015)。また、地域の子育て支援に取り組む人を対象としたインタビュー調査は山下(2004)や田淵(2008)のように、女性を対象としたものがほとんどで、祖父世代である高齢男性自身に焦点を当てた研究はほとんどないのが現状である。近年広がりを見せている高齢男性による子育て支援であるが、高齢男性はどのような意識をもって地域の子育て支援に取り組んでいるのだろうか。高齢男性による子育て支援の実態を明らかにしていきたい。そこで本研究では、子育て支援活動に取り組む中で高齢男性はどのような意識を抱いているのかについて検討を行っていく。このような観点から調査を進めていくことは、今後の地域の子育て支援における高齢男性の参入について考える一助となるのではないかと考える。

2 研究方法

2.1 調査対象

本研究では、A市における「“ぐらんぱ”育児支援事業」の受講生が立ち上げた、子育て支援を行う高齢男性の会「Aぐらんぱの会」²に注目する。横川ら(2015)の研究では、祖父母世代を地域の子育て支援活動参画へと結びつけるためには、「きっかけとなる場」と「祖父母世代をつなぐ役割」の重要性を示している。このA市の子育て支援において、当時A市役所の健康づくり部が市民を対象に企画した「講演会(シンポジウム)」が、横川らの「きっかけとなる場」に当てはまり、また、市が「祖父母世代をつなぐ役割」となって高齢男性と保育・教育現場をつないでいる。そしてこの講座の修了生が2013年に「Aぐらんぱの会」を発足し、現在1期生から4期生まで約40名で活動を行っている。このように行政が地域の高齢男性を子育て支援に結びつける役割を果たし、それがきっかけとなって子育て支援を行う高齢男性の団体へと発展していったことから、この団体に注目することとした。

当時のこの事業の担当の保健師であった望月は保健師の視点から、高齢者の健康長寿を目指す方法の一つとして、シニア男性の潜在力を地域の子育て支援の活動に活かすという目的のもとこの“ぐらんぱ”育児支援事業を企画し、実践を行った。

この「Aぐらんぱの会」には、子育て支援活動を担当する子育て支援部会、地域交流活動を担当する地域交流部会、会の事務処理及び会員活動の環境整備を担当する総務部会が存在する。子育て支援部会としては、保育園や小学校、放課後児童クラブで支援活動を行っている。また地域交流部会では、「親子で楽しむ手品講習会」「親子で楽しむ科学教室」といった地域の親子を対象としたイベントを開催する等している。そして総務部会では、会員のスキルアップのための講座や合宿の企画運営や広報活動を行っている。

本研究でのインタビュー対象者はこの「Aぐらんぱの会」の会員18名である。対象者の基本属性を以下の表1に示す。対象者の年齢は、60歳から76歳で、平均年齢は69.2歳となった。対象者18名のうち1期生が7人、2期生が4人、3期生が5人、4期生が2人であった。職歴に関しては、ほとんどの対象者が退職するまで企業でサラリーマンとして働いていた。また、この地域は都心へのアクセスも便利であることから、都内の大手企業に通勤していた男性が多かった。加えて、この地域に大手製造会社があることも

あって、製造関係の仕事に就いていた人が多かった。現在の収入に関しては、会社顧問や不動産管理、学習塾の講師等で収入を得ている人もいた。また福祉関係の有償ボランティアを行っている人もいた。同居に関しては、一人を除いてすべてが妻と暮らしており、子どもと同居している家庭もみられた。対象者全員に孫はいるが、同居している人は一人もいなかった。また、住んでいる地域は、Rさん以外は皆A市に住んでおり、Rさんは隣のB市に住んでいた。

表1 インタビュー対象者一覧

	年齢	活動開始年(期生)	団体内での役職	職歴	収入の有無	同居の有無
A	60代後半	2013(1期生)	役員	会社員	なし	妻、子
B	70代後半	2013(1期生)	特になし	会社員	なし	妻、子
C	60代後半	2013(1期生)	特になし	会社員	あり	妻
D	70代前半	2013(1期生)	特になし	会社員	なし	妻
E	60代後半	2013(1期生)	役員	会社員	なし	妻
F	70代前半	2013(1期生)	役員	会社員	有償ボランティア	妻
G	60代後半	2013(1期生)	特になし	教育関係	有償ボランティア	妻
H	60代後半	2014(2期生)	役員	会社員	あり	妻
I	70代前半	2014(2期生)	役員	会社員	なし	妻
J	70代前半	2014(2期生)	特になし	会社員	あり	妻
K	70代前半	2014(2期生)	役員	会社員	有償ボランティア	なし
L	70代前半	2015(3期生)	役員	教育関係	なし	妻
M	60代後半	2015(3期生)	役員	会社員	あり	妻
N	60代後半	2015(3期生)	特になし	会社員	あり	妻
O	60代後半	2015(3期生)	特になし	会社員	なし	妻
P	60代後半	2015(3期生)	役員	会社員	あり	妻
Q	60代後半	2016(4期生)	役員	会社員	なし	妻
R	60代前半	2016(4期生)	役員	会社員	なし	妻、子

2.2 調査の手続きと調査内容

本調査では、この18名の会員を対象に、2016年10月に個別インタビューを1時間前後で行った。インタビュー日時、場所については対象者の希望に極力合わせて行った。場所はA市の喫茶店や地域の公共施設等で行った。インタビューを開始するにあたって、研究の概要と個人情報の保護に関する事項を明記した承諾書を読んでもらい、インタビューの承認を得た。インタビューの際は、対象者に許可を取った上でICレコーダーに録音し、後日文書化して整理した。なお、本調査はお茶の水女子大学倫理審査委員会の承認を得ている(受付番号2016-46)。

調査内容については、はじめに対象者の基本属性を聞き、その後、質問に回答する流れでインタビューを実施した。本調査では半構造化インタビューの形式をとり、質問の順番は協力者の回答に即して自由に入れ替え、かつ協力者の自由な応答も許容してそれを記録するような方法で実施した。基本属性については、年齢、この団体での活動歴、団体内での役職、就労状況(過去と現在)、現在の収入の有無、住んでいるところ、同居の有無、孫の有無について回答してもらった。基本属性についての質問が終わり次第、インタビューへと移行した。インタビューガイドの内容は、「現在参加している支援内容について(1項目)」「活動開始の動機と継続の動機について(1項目)」「この他の社会活動の参加について(1項目)」、「取

り組んでいる活動と自身について(5項目)」「今後の課題について(1項目)」の5つのカテゴリで構成されている。また、インタビュー対象者の回答や状況に合わせて、質問事項に新たな質問や説明を加えることもあった³。

2.3 分析方法

本研究の分析にあたっては、佐藤(2008)に倣い、帰納的アプローチを用いた。インタビュー資料を読み込みながら、思いつくままにコードを書き込む「オープン・コーディング」を行い、そこから更に抽象度の高い概念カテゴリに対応するコードを割り振っていく「焦点的コーディング」を行った。具体的には、「高齢によるもの」、「男性によるもの」、「高齢男性であることによるもの」に割り振り、分析を行った⁴。

3 結果

3.1 高齢男性としての優位性

高齢男性は、高齢男性が子育て支援団体を設立して活動を行っていく中で、高齢男性ということに優位性を感じていることが見出された。その例として以下の語りを紹介する。(以下下線部は筆者による。)

3.1.1 高齢男性同士の関係性

利害関係あんまりないからね。例えばあの、会社なんかだとね、意外と出世競争とかね、利害関係とかいろいろあるけど、こっちは全然そういうのいからね。そういう点じゃ、全くのボランティアだし、あの、意外と本音で話し合えるあれはあると思うんだよね、うん。[Bさん]

ここでの集まりには、出世等が絡んでいた会社での付き合いと比べて「利害関係」がなく、「本音で話し合える」環境であるとBさんは述べている。これは、退職したシニア世代同士の関係だからいえることであろう。

3.1.2 過去の経験

Hさんは働いていた頃の経験と現在の活動について下記のように述べている。

現役で仕事やってるときの、あの、仕事の進め方みたいなものが、えー、時に生かされる場合があるんです。例えば、PDCAって知ってるでしょ？PDCAを回していこうっていうのは、あの、やってるんですよ。あの、必ずやったらアンケートをとって、アンケートの中身を分析して、まあえー、PDCAで次につなげるということを、基本はそれでやってるんですよ。それは会社のときにたたき込まれたやり方で。[Hさん]

Hさんは、現役時代のPDCAサイクルを現在の活動にも活かしている。会のイベントの際には必ずアンケートを実施して、反省し、次の活動につなげるようにしていると述べている。同じように現役で働いていた頃のことと現在の活動について、長年企業で営業部門を担当していたFさんは以下のように語っている。

営業がすごく生きてるなと思います。要するに、人との関わりを苦しめない、話をすることが苦にならない。だから、ほかの団体と関わることも苦しめないし、地域の人から声かけられても苦にならないし。それは、営業部門で人と関わってたからだろうなど。営業やってる人はつぶしが効かないってよく言われるんだけど、専門的な知識ではなくって、そういう関わり方が私の場合は役に立ってるんだらうなっていうふうに思ってますね。[Fさん]

この語りの背景として、Fさんは地域の様々な団体に所属し、このぐらんぱの会と地域の他の団体をつなぐ役割を担っている。Fさんにとってサラリーマン時代に営業として様々な人と関わってきたことは、現在地域のネットワーク築くことに役立つこととなっている。

上記のように、高齢男性は社会で働いてきた経験が子育て支援活動に優位に働いていると自覚している。A市の事業において、「社会的経験豊かなシニア男性の潜在能力」(望月ら 2015 : 613)が子育て支援に求められているとされていたが、ここでいう「社会的経験豊かなシニア男性の潜在能力」は、具体的には長年仕事で培ってきた、組織としての仕事の進め方や関係の築き方等のことであることが分かった。

また、働いていた頃の経験の他にも、子ども時代の経験が現在の子育て支援の活動に優位に働いているとPさんは以下のように述べている。

我々の活動通じていえることは、あの、お金をかけずに、あるいはいわゆる電子ゲーム、あるいはスマホね、電子ゲーム含めてですけど、そういったものだけじゃなくて、自分の身体を、手指を動かして、あるいは手作りの紙とか木でおもちゃを作って遊ぶっていう、こういう素朴な遊びのスタートとか原点っていうかな、そういったのをね、僕らは伝えていくことが出来るんじゃないかな。[Pさん]

上記のようにPさんは、高齢男性の遊びの技術が今の親子に伝承されることに対して優位性があると自覚している。また、この会ではこういった遊びの技術を親子だけでなく現場の先生にも伝えようと、先生方を対象とした遊びのイベントを開いて活動の幅をさらに広げている。

3.1.3 高齢男性による子育て支援という特異性

こうして高齢男性のもつ経験を活かして子育て支援をすることに対してMさんは以下のように語っている。

ユニークさがあるかな。その、世間から見たときに。男性、シニア男性の子育てという。だから、どいう風に言うのかな、特異な存在として主張できるというか表現できるというかね。認めてもらえるとか。ええ、それをまあ感じますよね。だからあの、広めていくようなね、これであまくいって広めていくと。そういう面白味が今後あるなあと。先駆者として。だからまあそういう意味でも先駆者としてのなんか使命とかモチベーションとかね、ありますよね。[Mさん]

Mさんは、高齢男性だけの子育て支援団体という世間から見た「ユニークさ」を優位性と自覚している。また、まだ全国的には珍しい団体であるということから、「先駆者」として活動していくことに対してモチベーションを感じていた。

このように、高齢男性は、それぞれが高齢男性であるという強みを自覚して地域の子育て支援に取り組んでいるという実態が明らかになった。

3.2 高齢男性としての困難

高齢男性が子育て支援に取り組む中で抱く困難に関するエピソードを抽出すると、高齢男性という立場だからこそ感じる困難が見られた。以下でその例を紹介する。

3.2.1 会社経験の延長

自分の経験がよいという、自分の人生観をもって、こだわるところも感じるわけですよ。なかなか柔らかくないという。まあ、固い、頭が固いっていうかね、自分の経験にこだわっちゃうとか。そういう欠点もありますね。[Mさん]

Mさんは、高齢男性の欠点として、これまでの自分の経験にこだわって柔軟に物事を考えられない面があると述べている。Hさんも意見を述べ合う場面で同じようなことを感じている。

もめるんです。いろんな場面でね。これは例えば、特に理事会だな。活動の方向性とか方針をめぐっている意見が出る。これは出た方がいいとは思ってるんだけど。出るねってか、自分が会社でやってきたような仕事の進め方が各々違うわけだから、まあ出て当然なんだけど。どんどん出たほうがいいとは思ってるんだけど、どうしてわかんないかなと思うときはあります。当たり前のことだよねって思ってるのが、この人から見ると全然違う。それはもう経験が違うから、それは分かった上で思うけど、やっぱり意見が違うね。でも違ってもいいとは思ってるんだけどね。あの、会社にいるとそれでその自分の仕事の成果とか自分のまあ例えば将来の方向性とか仕事の場合は決まっちゃうけどね。今の我々の活動はそういうことないから。[Hさん]

Hさんは、このように様々な意見が出ることはよいことだと認めつつも、理事会などでの話し合いの場面において難しさを感じていると述べている。

また、類似した観点から、高齢男性のもつプライドが活動を行う上で邪魔をしていると考えるCさんの語りがある。

会で集まった時に、昔の会社社会を引きずって、えー、PDCAがどうだとかね。それから結構男は、我々もわたしもそうですけども、それなりにあの、プライドがあって、なかなかそれがなくなるない部分があるんですね。だから、子どもと同じ目線で、楽しくない、私が楽しくないっていうのは、子どもと同じ目線で遊んだりなんかとっててもやられてないやっって部分があるんです。あのまあ、せいぜい遊んで、孫もそうですけど、15分くらい一緒に遊んであげるけども、それ以上はちょっともう飽きちゃって。[Cさん]

このようにCさんは、子育て支援をする上で、長年社会で働いていた経験によるプライドが邪魔をしていると捉えている。自身のプライドが邪魔をして子どもと遊ぶことに対して少し苦痛を感じることもあるという。続けて次のようにも語っていた。

例えば我々がね、そんなに深入りしようと思ったら、週1回くらい小学校に行ったぐらいじゃ何にもなんない。むしろ邪魔。毎日来てくれればそれなりにありがたいかもしれないけども、週2回ぐらいだったら邪魔。それでなんかいろんなこと言ったら邪魔になる可能性の方が強いですね。例えばね、あの、どこに行ってもそうだと思うけど、情報が少ないんです。お子さんのそのあの、相対するお子

さんに、このお子さんがどういう家庭環境にいるのかという情報は我々は一切もらってないですから。で、それを不満に思うときもあるんですけども、でもまあよくよく考えたら当たり前で、情報たくさんもらったらかえってコミュニケーションがたくさん出てきて。まあ、先に進む方もいるかもしれない、先に進むっていうのは、もっとのめり込む方もいるかもしれない。僕はそこまでのめり込むつもりはちょっとないし。まあ、どっちかっていうと嫌ですね。だからまあ、情報が少ないのはしょうがない。だから例えば、会社において、みなさん管理職だった。するとまあ、よく言うホウレンソウで、必ず部下には情報あげなさい、それから自分も情報を上司にあげましようということを中心にしていたんで、情報が少ないと、非常に違和感とか不満を感じる、うん。でも実際にじゃあ、すべて情報開示しますって言われたら、対応できないですよ、うん。[Cさん]

Cさんは、情報の共有を重要としていたサラリーマン時代のことがあるため、子育て支援活動においても、支援する子どもたちの情報を求めているところがあり、その情報を伝えてもらえないと不満を感じることもあると述べている。しかし一方で、子どもに関する情報が全て伝えられたところで、自分には対応しきれないとも認識している。

上記のように否定的な意見も語ってるCさんであるが、こういった考えを持ちつつも現在においても活動を続けている理由についてこう述べていた。

あの、どちらかという、今、義務感っていうかね、まあ1期でこの会を立ち上げたこともあるんで、その立ち上げのときはやっぱりちょっと一生懸命頑張ったというか、会則とかも作ったりして頑張ったこともあったんで。[Cさん]

先ほどCさんは、プライドがあって子どもたちと同じ目線で遊べないと述べているが、Cさんはこの会の1期生であり、会則を一からの作成する等会の立ち上げに大きく貢献していた。子どもと遊ぶことだけが子育て支援なのではなく、このように高齢男性が活動しやすいように会の事務処理をきちんと行える存在も必要だとCさんの存在からうかがえた。Cさんのような存在の働きによって、この会が現在も活動できているといえる。

上記から、高齢男性のこれまでの経験が子育て支援活動においても活かされているところがある反面、この経験がマイナスに作用している面もあることが明らかになった。高齢男性は、これまでの経験からくるプライドや経験から得たものが子どもと関わる上で障害になってしまいうところがある。これは、これまでサラリーマンとして長く働いてきた経験をもつ高齢男性だからこそ抱く困難であるといえよう。

3.2.2 高齢男性の子育て支援という特異性

また高齢男性は、高齢男性だけで会を立ち上げたものの、実際に活動していくと困難を感じるがあったという。

ぐらんぱって特別に子育て支援員、それはまれかもしれないけど、まれっていうのは逆に言うと、そういう必要性がないんですよ。ぐらんぱっていうかその、社会的な経験とかなんとかっていうのが子育て支援になんか役立つかっていうと、役立つ必然性が何もないんですよ。[Cさん]

Cさんは、高齢男性が子育て支援団体を立ち上げたものの、こういった団体が少ないのは必要性がないからだとして述べている。また、社会的な経験が子育て支援に直接的に役立つとは感じていない。同じように、この会に入ったものの、子育て支援に活かせるようなことはないと感じ、なかなか会のイベントに参加できないという高齢男性もいる。そういった問題を解決するために今年度から団体内で「スキルアップ講座」

というものが行われている。この講座を発案した P さんは以下のように語っている。

私がちょっと仕掛けたんだけど、会としてね。これあの会員対象なんだけど、あの、「スキルアップ講習会」ってのをやってるんです。(中略)これね、あの目的がいくつかあるんだけど、ひとつは、あの、会員のね、いろんな活動への参加の機会を増やそうと。で、というよりも参加への垣根を低くしよう。自分が入会したときにいろんなイベントに誘われてもまだ自分のできることが少なかった。それでやっぱり同じような人が多いんじゃないかなと。だから不得手なことを、あるいはできないことを減らそうと。そうすれば参加する機会が。ということであんまり肩ひじ張らずに、講師を仲間から選んで、その人に教えてもらう。で、みんながそれができるようにする。そうすると、「次のイベントでこれやってくれない？」とか「来ない？」って言った時に、あの、参加しやすくなるんですね。それがひとつ。[P さん]

P さんは、自身がこの会に入った際に、イベントに参加してもできることが少なかったという。こういった人は他にもいるのではと思い、できることを増やしていくためにこの「スキルアップ講座」を発案した。この「スキルアップ講座」とは、会員が得意とする遊びを他の会員と教えあい、遊びのスキルをアップさせ、今後のイベントで活かせるようにするというものである。この講座について P さんは以下のようにも語っている。

このスキルアップ教室はね、今種まきしてるところですけど。これはね、2年先3年先ね、かなり力を発揮できるんじゃないかなという気がしてます。こういったことは意図的にやっていかないと、なかなかね。特にボランティアではね。個人の持ち味、得意技で終わってしまうんですよ。それをやっぱり組織の力にかえるっていうね、うん。どうしてもあの、得意技を持っている人はそれでね、終わって満足しているんですよ、結構ね、うん。あの趣味範囲のところの延長ですからね。だから会として考えた時はちょっと視点が変わって。みなさんその価値がね、わりと感じられていない場合が多いんです。(中略)その価値をね、やっぱりみなさん意外と気がつかずに。われわれ自身がその価値をね、気付いてね、大事にしていきたいなど。行き着くところがぐらんぱブランドなんですよ(笑)。
[P さん]

P さんは、会員個人のもつ力を組織の力に変えようと考えている。P さんのように子育て支援に直接関わる技術がないと感じている人でも、このように様々な観点から物事を考え、企画し、実行していくといったように、高齢男性であるから抱える困難に対しても、工夫して乗り越えようとする姿勢がみられた。同じく P さんは会員が気軽に活動に参加できるように「男の井戸端会議」というものも提案したという。

もう一つは、それよりも大事なこともかもしれませんけどね。会員同士が親しくなる、仲良く活動できる。そういうね、まあ交流とか懇親っていうのをね、仲間の親睦っていうのを力入れてるんですね。だからその二番目特に力入れてるのはね、あの、そのためにあの、講座をやった後ね、「男の井戸端会議」ってのをやってるんですよ。1時間ちょっとぐらいね。(中略)軽く飲んで、話をしたり、意見交換したり、あるいは先輩のね経験なんか聞いたりして。あの、こうなんていうかなお互いを理解しあうというかな。それから気楽に楽しめる雰囲気、自ら楽しむというね、そういう雰囲気づくりをやってるんです。だから、講座の参加の呼びかけと同時に、あの、講座に出てこれなくてもこの井戸端会議に出てきませんかというような位置づけにしているんですね。これやっぱり背景はね、あの、一昨年の暮れに会員からのアンケートをとったんです。で、困りごととかね。そんななかでやっぱり「自分ができることが少ない」とか「なんとなく行きづらい」とかねいう声もあったから。それを少しず

つね、取り除くために何がいいかなと。で、理屈よりもまずね、そういう場をつくろうということでもちよっと仕掛けをしたんです。[Pさん]

Pさんは、会員同士の交流を深めて、活動に参加しやすい雰囲気をつくろうと「男の井戸端会議」というものも発案した。その背景には会員のアンケートに基づくものがあった。

上記のように、この会に入会したものの、高齢男性ゆえに、子育てに関する知識や技術がなく、実際の子育て支援活動の参加に対して困難を抱えていることがわかった。しかし、そういった困難を乗り越えるために、団体として様々な工夫を凝らした企画を行っていた。

さらにこのPさんは、今後のぐらんぱを育成する養成講座について以下のような展望を抱いていた。

この養成講座の中身は(地域子育て支援員の講座と)重複するところもあるし。で実習もわれわれ3日間やるしね。で、養成講座の一部をね、支援員講座とね、ラップさせてね、あの養成講座の修了生は支援員の資格が取れると。そういうね、インセンティブをつければね、もうちょっと関心も深まってくるのかなと。で、ニーズは間違いなくあると思うね。(中略)やっぱり公的なキャリアともつながりますし。そうすると今度A市だけではなくて他でね、入っていけるんですね、現場に。[Pさん]

Pさんは現在全国各地で行われている地域子育て支援員にも注目しており、このぐらんぱの養成講座が地域子育て支援員の講習と結びつけば、他の地域での支援にもいけるようになり、高齢男性の子育て支援の可能性が広がるのではないかと考えているという。

また、市が事業として行っているこの「ぐらんぱ」を育成した養成講座について、現在存続の課題があるという。

一事業として何年間かでお終いにしてしまったら講座を開いた意味がないということになると思うんですけど。たまたま教育関係のね、小学校とかそういうところで実習をしたということが、その、受け入れてくれる、支援に行きますよっていったときに、「ああ、あの人たちが来るんだな」ってことで受け入れてくれてる。それが(開始から)3年半積み重なってかなりの信頼があって、みんなから要望でてくるようになってというように今なってる。だから、きっかけはその生きがいつくり、健康づくりのための、講座の、道具だったけれども、それが時代に即してうまく動いている。それがあるんだけれども、逆にその事業が永続的にできるかという、行政としてはできないわけだから。ほんとはひとつのモデル事業としてずっと育ていかなないといけないし、ブランドにしていけるか、A市のね、ひとつのシニアの活動のあり方として、確立されていっていかっていうと、これからだと思うんですよ。それが今の問題なんで、その目の付け所は良いんだけど、その落としどころをどこに置くのかってのが今ぐらんぱの会自身が今悩んでることなんですよね。[Fさん]

A市は、2013年から養成講座を行ってきたが、シニア男性の社会参加のきっかけづくりとしての事業のひとつであったため、ぐらんぱの会として活動ができるようになってきた今、行政側は会が独立してほしいと望んでいるようである。

続けてFさんはこのようにも語っている。

(市の養成講座がなくなってしまうと)ただの団体の活動になっちゃう。そうそう。だから冠(市の講座を修了したというもの)がないと、今までは冠のもとに活動できてたのが、冠がなくなったら、そこ(活動範囲)はだんだんせばまっていくということになると思うんですね。それでも信頼がおいでもらえるような活動が続けられればまた別なんだけれども。「市が関わらなくなるとあの人たちに頼んどけば

大丈夫だよ」とかね、そうなればいいんだけど。市なんか当てにしないよっていうふうになれる力ももてるわけではないので。だからやっぱりその、産み落として、ある程度まで育ててきたんだから、それがちゃんと一人歩きしなさいよっていう風に完全に、その、委託を受けてやるとか。そういうことでもない限りは、あの、先細になってしまう。そうならないようにするには、あくまでも市と一緒になって養成講座を続けられる、続けていくか、あるいは単独で要請講座を開設するけども市のほうから委託を受けてやってるとか、そういうところがないと難しいって私はアドバイスするんですね。
[Fさん]

Fさんは、このぐらんぱの価値は、市の養成講座を修了したというところにあると捉えている。市という公的な立場から認めてもらったというものがないと、このぐらんぱの会の価値は薄れてしまう。そのために、この養成講座が続いていくように働きかけているという。

上記のことから、高齢男性による子育て支援という珍しさもあってこの取り組みが注目されているが、子育てに関する知識や技術が女性に比べて乏しい高齢男性は、実際の支援活動において、できることが少ないから積極的に参加できないという高齢男性もいることが分かった。しかし、その困難を乗り越えようと、会として様々な工夫を凝らした企画が行われていた。そこからまた新たな高齢男性の子育て支援という価値を見出そうとしていることがみてとれた。また、その高齢男性に価値を見出すきっかけとなった市の養成講座の存続が危ぶまれている実態があることがインタビューから明らかになった。この講座の修了によって地域からの信頼を得ていることから、これからも行政側の支援の継続が必要であると考えられる。

4 まとめと考察

本研究では、高齢男性はどのような意識をもって地域の子育て支援活動を行っているのかということについて検討を行った。

1点目に高齢男性が自覚する優位性についてみていった。高齢男性としての優位性には、高齢男性同士の関係によるもの、過去の経験によるもの、高齢男性の子育て支援という特異性によるものの3つがあった。高齢男性は、高齢男性同士の集まりに関して、会の中では会社で働いていた時代のように利害関係は存在せず、また女性の存在もないため、議論しやすいということを感じている。また、過去の経験が子育て支援活動に活かされているという点では、社会で働いてきた経験と子ども時代の経験の2つがあった。会社時代の経験においては、長年培った仕事の進め方や人との付き合い方などが子育て支援のネットワークを地域に広げていくことに役立っていた。また、子ども時代の経験からは、高齢男性が経験してきた遊び方が子育て支援活動において重要なものとなっていた。この高齢男性が作るおもちゃが、子どもたちへの遊びの伝承や、保護者や支援現場の職員との世代間交流のツールにもなっていた。

2点目に高齢男性が抱える困難についてみていった。高齢男性としての困難の要因として、会社経験の延長と高齢男性の子育て支援という特異性の2つがあった。会社経験の延長とは、長年会社という組織で働いてきたことが活動において活かされることがある一方で、高齢男性独特のプライドの高さが子育て支援活動においてマイナスに働いている場面もあった。また、高齢男性の子育て支援という特異性からは、子育て経験が乏しい高齢男性だけでは、実際にはできることが少ないと感じているという点があった。しかし、こういった困難を乗り越えようと組織として様々な工夫を凝らした取組を行っていることが見てとれた。また、これからの組織の課題として、地域の高齢男性を子育て支援者へと育成した養成講座の存続が危ぶまれていることがわかった。ここでは市からの修了認定が地域住民の信頼につながっていることから、これからも高齢男性が地域の子育て支援者として認められて活動を続けていくためには行政側の支援も必要となってくるだろう。

本研究では、地域の子育て支援に取り組む高齢男性のインタビューを通して、彼らがどういった意識を

もって活動に取り組んでいるのかという実態が明らかになった。しかし、このような彼らの取り組みが地域にとってどういった意義をもたらしているのかは、他の関係職員や子どもたちからの意見を聞くことが必要だろう。これを今後の課題として、地域における子育て支援について考えていきたい。

注

¹ 高齢者による子育て支援の先駆的な取組の事例として、埼玉県富士見市の中高年ボランティアによる子育てサロン「ミッキークラブ」や、山梨県甲府市による「子育て・お助け隊」、横浜市のNPO法人「びーのびーの」の取組がある。

² 「Aぐらんぱの会」のAとは、A市のことを示す。

³ インタビュー調査以外にも、高齢男性の支援の実態を把握するため、A市の小学校や放課後児童クラブ、団体主催のイベントで参与観察を行った。その際には、柴山(2006)の、「積極的な参与」の立場をとった。

⁴ 本論では、「高齢男性として抱く意識や困難」についてについてまとめた。「高齢者としての意識や困難」や「男性としての意識や困難」についての詳細は修士論文(塩谷, 2017)を参照されたい。

引用文献

- 平田裕美, 2003, 「青年期前期の子どもに対する父親の関わり—分類と特性—」『家族心理学研究』17(1): 35-54.
- 望月三枝子・佐原文子, 2015, 「シニア男性潜在力を生かした地域活動 朝霞市の“ぐらんぱ”育児支援事業」『保健師ジャーナル』71(7): 612-620.
- 名須川知子・上月素子・井上千晶・番匠明美・濱田格子・新道由記子, 2015, 「世代間交流としての子育て支援に関する研究—祖父母世代の意識調査から—」『兵庫教育大学研究紀要』47: 11-18.
- 佐藤郁哉, 2008, 『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社.
- 柴山真琴, 2006, 『子どもエスノグラフィー入門 技法の基礎から活用まで』新曜社.
- 清水美知子, 2006, 「シニア世代による子育て支援の実践—加古川市にここオープンルームを事例として」『関西国際大学紀要』7: 115-123.
- 塩谷侑佳, 2017, 「地域の子育て支援における高齢男性の意識と課題」お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科平成28年度修士論文
- 田渕恵, 2008, 「地域の祖父母世代の子育て支援動機に関する質的研究」『生老病死の行動科学』13: 33-43.
- 田渕恵・中原純, 2006, 「祖父母世代における子育て参加の可能性の検討」『生老病死の行動科学』11: 53-62.
- 八重樫牧子・江草安彦・李永喜・小河孝則・渡邊貴子, 2003, 「祖父母の子育て参加が母親の子育てに与える影響」『川崎医療福祉学会誌』13(2): 233-245.
- 山下亜紀子, 2004, 「育児支援者の動機付けに見る地域型育児支援の展望」『国立女性教育会館研究紀要』8: 39-50.
- 横川和章・名須川知子・大西もよ, 2015「子育て支援における祖父母世代のかかわりに関する研究—実践で学ぶ〈まちの寺子屋師範塾〉の事例から—」『兵庫教育大学研究紀要』40: 21-30.

謝辞

この研究に取り組むにあたってご協力くださったAぐらんぱの会の皆様、A市担当職員の方々、支援先の職員の方々に心より感謝申し上げます。